慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 「役割」概念の再検討 : E. Goffmanにおける"役割距離"の含意 |
| Sub Title | The concept of 'Role', reconsidered : some sociological implications of "role-distance" by E. Goffman |
| Author | 岩田, 若子(Iwata, Wakako) |
| Publisher | 慶應義塾大学大学院社会学研究科 |
| Publication year | 1988 |
| Jtitle | 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.28 (1988. ) ,p.11- 21 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 論文 |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000028-0011 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「役割」概念の再検討
## —E. Goffman における“役割距離”の含意—

# The Concept of 'Role' Reconsidered
## —Some Sociological Implications of "Role-distance" by E. Goffman—

岩田若子
*Wakako Iwata*

In this article, I assert that Erving Goffman tried to make clear the "role-distance" of individuals in social situations, and to integrate the holistic (mainly on social system level) and individualistic (mainly on personality system level) models of role phenomena, which creates a new horizon in sociology.

This article is divided into two parts; the first is concerned with comparing the two camps of role-theories—structural functionalism and symbolic interactionism—in terms of the three aspects of role which Levinson has distinguished. The aim of the second part is to codify these three aspects from Goffman's viewpoint and to clarify that his concept of "role-distance" does not refer to individual differences in psycho-biological attributes, but to "typical differences" in sociological attributes. His theory does not sufficiently explain the mechanism of individual role-distance. It still remains no more than an approach on social system level.

In order to supplement the above-mentioned limitations of Goffman's theoretical standpoint, and to bridge the traditional gap between individualistic and social system approaches, I will propose that some attempts should be made to elaborate the concept of "life-style" and to develop "the system of life" model.

## I. 問題の所在

役割概念は，ミクロな「相互作用過程」からマクロな「社会システム」まで，多様な社会現象の分析概念として，現代の社会学的分析における最も重要な概念である。しかしながら，この役割概念は，社会と個人の媒介概念としてさまざまな文脈において恣意的に用いられてきただけで，理論的体系化はいまだ十分になされていない。役割概念が社会学の領域に導入された歴史的背景を考慮するならば[1]，社会学創始以来のテーマである「社会と個人」の問題を解明するために，ミクロ，マクロ両レベルにおいて議論されている役割概念を，あらためて整理・体系化することが，なによりも急務と思われる。

社会学の分野における役割概念の混乱は，そもそも，役割理論研究における2つの異なる系譜に由来するものとされている。その一つは，リントン (R. Linton) に始まる構造機能主義の流れであり，もう一つは，ミード (G. H. Mead) に始まるシンボリック相互作用論の流れである。両者の根本的な相違点は，それぞれのアプローチ・レベルの違いにある。

「社会システム」レベルにおける役割理論の研究は，主として構造機能主義者たちによって行われてきた。彼らは，個人に先だって地位-役割の存在を前提とし個人はあとから地位を占有する，というマクロ・レベルからアプローチしている。彼らの考慮する理論やモデルが，パーソナリティやその他の心理的諸変数を十分に組み込んでいないという意味において，この系譜に属する研究は，個人不在の役割理論といわざるをえない。

一方，役割現象の究極因を，各個人のパーソナリティに条件づけられた自己形成あるいは自己意識に求めようとする諸研究は，シンボリック相互作用論の研究者たちによって進められてきた。彼らは，まず，個々人の存在を前提とし，その諸個人が相互作用を継続するプロセスにおいて彼ら独自の解釈によって役割を創造する，というミクロ・レベルの「相互作用過程」から接近している。この立場において考慮されている理論やモデルが，社会の構造的諸変数を十分に含んでいないという点で，シンボリック相互作用論者の理論化は，社会不在の役割理論といえるだろう。

シンボリック相互作用論における役割概念は，構造機能主義における役割概念に対する批判として提出されたもの[2]，と見なされることが多い。はたして，両者の主張する役割概念は相容れないものなのだろうか。「役割」という概念の中には，マクロへ向かう方向とミクロに集約する方向との両義性があることを十分認識しなければ，役割概念が社会と個人の媒介概念であることを主張できる根拠はないはずである。それゆえ，レヴィンソン (B. J. Levinson) が指摘したように，社会システム・レベルでの「構造的要求」(structural demands) としての役割の側面と，ミクロな個人レベルでの「役割観念」(role-conceptions) および「個人の役割パフォーマンス」(individual role-performance) としての役割の側面は，それぞれ，厳重に区別されるべきものであるが，それらの相互補完的な関係もまた，十分に考慮されなければならない[3]。

本稿では，以上のような問題意識を背景に，とくに次の2点を明らかにしたい。2つの系譜の役割概念が，先にふれた役割の3つの側面のいずれに属するものかを明確にし，ゴフマン (E. Goffman) の役割理論を援用することによって，それらの相互関連を考察する。さらに，この関連において，彼の提示した「役割距離」(role-distance) 概念の社会学的含意にも言及しておきたい。

## II. 役割理論の2つの系譜

社会学における2つの系譜の役割研究は，ディシプリンの差に基づく概念規定の相違や，それぞれが前提としているパラダイムの相違[1]から，まったく異なった説明原理を採用しており，従来，相互に関連づけられることも，また新しい視点からあらためて架橋されることも，ほとんどなかったといえる。この問題は，方法論的観点からみれば，いわゆる方法論的個人主義と全体論的視点の対立の一特殊ケースとして考えることもできるだろう。

本節では，両者の主張する役割概念が，レヴィンソンの提示した役割の3つの側面——「構造的要求」，「役割観念」，「個人の役割パフォーマンス」のいずれに属するものかを，代表的研究者の所説を例に挙げながら明らかにしたい。

### II—1 構造機能主義の役割概念

構造機能主義における役割概念の基礎を提示し，役割の概念規定を最初に定式化したのは，文化人類学者のリントンである[5]。彼は，地位と役割を対概念として用い，「地位なき役割はなく，役割なき地位はない」[6] ことを主張した。彼によれば，社会システムとは，諸個人間および個人と社会間の互酬的行動を統制する，理想的な諸パターンの総体である[7]。地位とは，「抽象的な意味では，特定のパターンにおける位置」であるが，「それを占有している個人とは別個のものであって，諸々の権利 (rights) と義務 (duties) の集合体にすぎない」[8]。一方，役割とは，「地位のダイナミックな側面」を表象している。すなわち，個人が「地位を構成する権利と義務を具体的に行使する場合，役割を遂行している」[9] といえるのである。したがって，役割は，地位を単に機能化するものに他ならない。

パーソンズ (T. Parsons) を旗手とする構造機能主義も，基本的には，リントンの役割理論を継承している。パーソンズによれば，社会システムの基本単位を構成しているのは，地位-役割である。その地位-役割は，個人が一つのパターン化された相互作用の関係に参加する際の，2つの異なる様式を示している[10]。すなわち，地位とは，個人が他の諸個人に対して，社会システム内のどこに位置するかという「位置的な側面」である。一方，役割とは，社会システムに対する機能的な意義という文脈からみて，個人が他の諸個人との関係においてどのように振舞っているかという「過程的な側面」である。この限りでは，リントンの定義と同じように，役割を「地位のダイナミックな側面」であるとみなしていることになる。

しかし，この概念規定の背後には，構造機能主義の基本的な論理が前提となっている。その基本的な論理とは，次のようなものである。すなわち，「まず社会システムにとっての目的が仮定される。つぎにシステムの諸構成単位は，このシステムの目標の実現にむかって貢献することを要求されていると仮定し，それらの諸単位の活動をシステムの目標の実現という基準から評価する。現行の役割配置の制度的構造のもとで，システムの目標

が効率的に実現されているとき，システムはその構造において均衡状態にあるという。システムが現行の制度的構造のもとで均衡状態になければ，システム内に現行の構造を均衡の方向に動かしていく力が作用するであろう。その結果，システムは，新しい均衡点に収斂するまで運動を続けるだろう」[11]，というものである。

上記のように，社会システムの成員である個人に，システムの存続維持に必要な機能的要件に沿って分化した役割を配分し，その活動をシステムの目標実現という機能的貢献から評価するだけで，諸個人の主体性を無視してしまっている点において[12]，パーソンズの定義もリントンの古典的定義の延長線上にあるといわざるをえない。

構造機能主義の系譜には，パーソンズ以外に，マートン (R. K. Merton)[13]，グロス (N. Gross)[14]，ネーデル (S. F. Nadel)[15]，ダーレンドルフ (R. Dahrendorf) などが名を連ねている。なかでも，ダーレンドルフがこの系譜に位置づけられているのは，いささか皮肉な感がある。かつて，彼は，パーソンズの社会システム論に内在する統合主義ないし均衡主義に批判を加え，それにとってかわるものとして，闘争モデルを提唱した[16]。それにもかかわらず，結果的には，構造機能主義の主張する統合理論を肯定することになり，その概念規定の定着を，いっそう強化する立場となってしまった。

ダーレンドルフによれば，社会的役割のカテゴリーを特徴づけているものには，次の3つがあるという[17]。すなわち，第1に，社会的役割は，地位と同じく行為規定の準-客観的で個人から基本的に独立した複合体である。第2に，社会的役割に特有の内容は，ある個人によってではなく，社会によって規定され，あるいは変えられるものである。第3に，個人は，自らに不利益を受けることなく，役割期待を無視したり拒否したりすることはできない。個人にとって，社会がときに「腹立たしい事実」である理由は，この3点に内在しているといえる。ダーレンドルフは，現実には，個人は自己のパーソナリティ等の心理的諸変数に条件付けられて役割をパフォーマンスしていることを指摘した。しかし他方で，役割が超個人的で客観的な社会的事実であるという理由から，個人は「社会の部分」となるために役割期待を学び，「ホモ・ソシオロジクス」(homo-sociologics) にならなければならないことも認めたのである[18]。

ホモ・ソシオロジクスとは，社会の外在的期待に拘束されて受動的に自己の行為を形づくる，いわゆる“あやつり人形”のような存在である。そこにおける個人の自己は，能動性，主体性，創造性といった側面をもたないものとなってしまう。ダーレンドルフ自身も，このホモ・ソシオロジクスが概念的構成物にすぎないことを認めているのだが[19]，結局，“ホモ・ソシオロジクス”こそ，構造機能主義の捉える最終的な人間像の帰着点といえるだろう。

以上，リントンを源流とする構造機能主義的立場における役割理論を概観してきた。この系譜における役割は，マクロな社会システム・レベルでの概念化である。地位-役割が社会システムの構成単位であるということは，それが社会システムの特性であっても，必ずしも個人の特性であるわけではないことを意味している。結局，構造機能主義の主張する「役割」は，社会が個人に対して課題として要求し，外在的な拘束力をもつ「構造的要求」の側面を指示しているのである。

### II—2 シンボリック相互作用論の役割概念

一方，ミードを始祖とするシンボリック相互作用論における役割理論は，構造機能主義の所説に対する批判から出発したもので発生論的見地からの再構成とみなされている。ブルーマー (H. Blumer) によれば，この立場の基本的前提は，次の3点である[20]。すなわち，第1に，個人が事物に対して反応する場合，彼は，その事物が自分に対して有する意味に基づいて行動する。第2に，そのような事物の意味は，個人が参加する社会的相互作用から派生ないし発生する。第3に，これらの意味は，個人の解釈過程において処理され，または修正される。

こうした基本的前提から，「個人」，「社会的相互作用」，「社会構造」についての見解が次のように引き出される[21]。社会的行為者としての「個人」は，社会的状況およびその状況の意味を構成したり解釈したりする際の，能動的な行為主体である。「社会的相互作用」とは，利用可能な広範な役割期待から主体的に選択された目的にしたがって，諸個人が着手する行為の回路である。そして，「社会構造」とは，過程的・創発的に構成されたものであるため，ある一定時点での社会構造の記述は，絶え間なく変化する光景を写した一枚のスナップ写真にたとえられる。

シンボリック相互作用論における役割概念は，他者の「役割取得」(role-taking) による自己 (self) 形成と密接に関連している。

“I と me の対話”で知られるミードの自己形成論において，はじめて「役割取得」概念が提出された[22]。ミードによれば，自己の発達過程は，遊びの中で特定の他者の役割を取得する「プレイ」の段階から，複数の相異なる役割の全体の中に自己を位置づけることを学ぶ「ゲ

ーム」の段階を経て，さらに，「一般化された他者」(generalized others) の役割を取得することによって，より完全なものとなる[23]。

このようにある個人が，想像によって他者の観点から自分自身を再帰的にみることができるようになったとき，そこに彼の「客我」(me) が成立するのである。客我とは，「個人が推測した他者の態度の組織化されたセット」[24] である。それは，他者の期待をそのまま受け入れて形づくられる自己の側面を示す。これに対して，客我に反応し，それに働きかける自己の側面を「主我」(I) と呼ぶ。この主我の反応は，彼がおかれている社会的状況に対する反応であって，客我に抵抗し，それを修正し変容するような社会変革を志向している。それゆえ，主我は，「自由とか自発性の観念」[25] をもたらすのである。

ミードの自己論において，自己の最も基本的な特徴は，自己が主語にも目的語にもなりうるということである。この際の，他者の観点に立つこと，あるいは他者の立場を想像上共有することが，他者の「役割取得」に他ならない。

ターナー (R. H. Turner) は，ミードの役割取得論を継承発展させ，「役割形成」(role-making) 概念をあらたに提示した[26]。彼は，役割を「意味のある単位を構成し，社会における特定の地位を占有している（たとえば医者や父親），社会におけるインフォーマルに定義された位置を占有している（たとえばリーダーや仲裁役），あるいは社会における特定の価値と同一視される，ある人に相応しいとみなされる行動パターンの集合」[27] と定義している。この概念規定は，特定の個人に働きかけている，まったく個人的な一連の役割期待を含んでいる。したがって，ターナーの主張する「役割取得」論は，ミードの場合と異なり，より複雑なものとなる。

ターナーは，まず，役割取得における「立場」(standpoint) の採用を次の3つに分類した[28]。すなわち，第1に，個人が他者の立場を自分のものとして採用する場合，第2に，他者の役割が人格的な第三者集団や非人格的な規範の立場から考察される場合，第3に，他者の役割が個人と他者の相互作用の結果という立場からみられる場合である。さらに，役割取得には，「再帰的役割取得」(reflexive role-taking) と「非再帰的役割取得」(nonreflexive role-taking) があると想定され，これをさきの「立場の採用の3類型」と組み合わせることによって，最終的には6つの役割取得類型が得られる[29]。したがって，役割取得には多くの側面があるため，個人は，実際には他者の役割期待を主体的・選択的に知覚し，それによって役割を創造し，修正しているといえるのである。換言するならば，他者との相互作用過程は，単なる「役割取得」のみの過程ではなく，同時に「役割形成」の過程でもある[30]。

以上，ミードとターナーをとり上げ，シンボリック相互作用論における役割概念を概観した。同様な見解は，シブタニ (T. Shibutani)[31]，ウリー (J. Urry)[32]，ブルーマー[33]などにもみられる。ここで仮定されている人間像は，「過度に社会化された人間」(oversocialised man)[34] ではなく，他者の役割期待を自らに引き寄せて解釈し，選択し，修正した上で，自己を組織化する，能動的で主体的な人間である。したがって，この系譜における「役割」は，地位よりむしろミクロな相互作用過程に関連した個人の自己形成，すなわち「役割観念」の側面を発生論的見地から明らかにしようとしたものといえる。

最後に，本節を総括する上で，次の点をあらためて確認しておきたい。周知のように，社会システムにおける地位と不可分な役割期待は，「するべき行動」を明示する行動様式と，それに結び付いた「あるべき姿」を示唆する存在様式から構成されている。行動様式は，たとえば，出席をとる，窓を開ける，戸締りをするといった「職務規定」によって示されている。一方，それに結び付いた存在様式は，たとえば，親切な，あたたかみのある，誠実なといった感情，態度，信念，価値等の「資質」(あるいは「属性」)，および必要な知識や技術等の「能力」を暗示しており，一般的に，身振り，服装，マナーといった地位を示す手がかり——非言語的コミュニケーション・メディア——によって象徴されることが多い。それはまた，それぞれの地位に対して要員を補充するための適格性の基準ともなる。したがって，存在様式は，個人が役割を取得する際に基礎となるレディーメイドの自己イメージ，つまり役割の社会的意味を提示しているのである。それゆえ，個人は既存の社会的資源の配分関係に異議を申し立てることができるのである。

この点を十分に認識するならば，構造機能主義における「構造的要求」としての「役割」は，主として行動様式に偏向したものであり，シンボリック相互作用論における個人の「役割観念」としての「役割」は，主として存在様式に偏向したものであることが，容易に確認できるだろう。また，「役割」は，資質や能力といった存在様式に偏って概念規定されると，「自己」概念とまったく変わりのないものとなってしまう。それゆえ，役割期待に事前に備わっている存在様式としてのレディーメイ

ドの「自己」と，特定個人の創発的「自己」とは，厳密には，区別されるべきものなのである。

## III. 「役割」概念の整理と「役割距離」

シンボリック相互作用論者の多くは，すでに述べたように，リントンに始まる構造機能主義的役割同調理論への批判を出発点としていた。これとは対照的に，ゴフマンは構造機能主義の基本的な考え方を形式的に受容しながらも，"規範的アプローチから状況的アプローチへの転換"を提唱した[35]。構造機能主義における役割分析では，役割の分化と統合から生じる社会システムに焦点がおかれていたため，そこで仮定されていた「多元的役割演技者」(multiple role player) としての個人の問題は不問に付されたままであった。

ゴフマンは，一定の時間と空間によって仕切られた社会的状況における個人を関心の中心とした。というのは，個人の「役割パフォーマンス」に分析の焦点をあわせることによって，はじめて個人がいかにして多元的役割をうまく処理しているか，ひいては個人がいかに役割葛藤を回避しているのか，そのメカニズムの解明に着手することが可能だからである[36]。

本節においては，状況的アプローチの立場から，役割の3つの側面をあらためて区別し，それらの相互補完的関係を指摘する。それと同時に，ゴフマンの提出した「役割距離」概念の社会学的含意もあわせて検討したい。

ゴフマンは,「状況的活動システム」(situated activity system) ——社会的場面——が具体的な個人に先行して決定されていることを，基本的な前提としている。社会生活におけるこの目的論的仮定は，構造機能主義の所説を状況的論的見地から改訂したものである[37]。

社会システムの現行の制度的役割構造における地位-役割は，組織体レベルでの解釈を経てはじめて個人が占有できるものとなる。というのは，具体的な組織体においては，位置のネットワークあるいは地位のヒエラルキーが個人に明示されているからである。たとえば，医療システムに対応する病院においては，一般的に，院長，医師，看護婦，患者，病院の事務員などの位置のネットワークあるいは地位のヒエラルキー構造が組織化されている。だが，この組織体レベルにおいても，それぞれの地位-役割の相互依存的関係を示すシステム的特性が明細化されているわけではない[38]。つまり，どのような地位-役割が単一の共同活動パターンに組み込まれているか不明なのである。

個人が実際に役割をパフォーマンスするためには，現実の舞台となるものが必要である。この舞台となるものが，ゴフマンの指摘する「状況的活動システム」に他ならない。それは，「社会施設」(social establishment) の中の，物理的に仕切られた局域 (regions) で生じる，「ある程度，閉鎖的で，自己補整的，自己完結的な，参加者同士の相互依存的な行為の回路」[39] を示す。たとえば，病院という施設においては，待合室，受付，診療室，手術室などの部屋があり，それぞれの部屋の中では単一の共同活動のパターンが予定されている。周知のように，診療室では患者の診察，手術室では患者の手術といった活動システムがある。したがって，状況的活動システムは，個人の役割パフォーマンスのための文脈上の準拠点となっている。そして，それこそが，ゴフマンの役割分析における準拠システムなのである[40]。

状況的活動システムに参加する諸個人は，公式には，「状況的役割」(situated role) に基づいてカテゴライズされる。状況的役割の生成過程について，ゴフマンは次のように述べている[41]。

> ある状況的システムの行程が頻繁に繰り返されると，十分に発達した状況的役割が現われてくるようである。すなわち，行為は，操作可能な束，つまり単独の参加者によって矛盾なく遂行されうるそれぞれの行為のセットに分割されるようになる。この役割生成 (role-formation) に加えて，役割分化が生じる傾向がある。それゆえ，参加しているあるカテゴリーの成員が遂行する活動群は，他のカテゴリーの成員が遂行するセットに依存しているが，それとは異なるものである。したがって，状況的役割とは，一連の他者たちの見ている前で遂行され，その他者たちが遂行する活動に組み込まれる活動の束なのである。

状況的役割は，厳密には，社会システムにおける制度的ないしは規範的役割とは区別される。規範的役割とは，日常生活においてそれ自体役割名称とステレオタイプ化したイメージをともなった，一つのカテゴリーとして十分確立されたものである[42]。つまり，それは，構造機能主義において仮定されていた役割を指している。たとえば，医師，弁護士，教師といったカテゴリーがある。これらの役割は，権利と義務の遂行が法的に規定されてはいるものの，その具体的な活動内容やそれがいかなる活動システムに組み込まれているかまでは，法はなにも語ってくれないのである。それゆえ，規範的役割は，組織的役割として実現され，さらに状況的役割とし

て各々の状況的活動システムに組み込まれて，はじめて個人にとって手の届くものとなる。したがって，規範的役割そのもののパフォーマンスは実現不可能であるため，日常生活においては，規範的役割への部分的関与にすぎない“状況的役割パフォーマンス”が行われているといえるのである。

すでにみてきたように，構造機能主義における規範的役割は，役割の「構造的要求」としての側面を概念化したものであった。ゴフマンの提示した状況的役割は，相互作用過程に密接に関連して概念化されてはいるが，それは，やはり規範的役割の下位役割にすぎない。したがって，それは，レベルの違いがあるにせよ「構造的要求」であることに変わりはない。状況的役割も，規範的役割と同様に，個人にとっては外在的な拘束力をもつ社会的事実に他ならない，と筆者は考える。

次に，組織体内で特定の地位を占有した個人は，いかにして役割を取得し，形成していくかという「役割観念」の問題に移りたい。

社会的状況における個人の位置とは，個人が自分のおかれている状況をどのように知覚し，定義づけるかという，主観的な反応に依存している。この点は，シンボリック相互作用論においても，かなり曖昧に処理されてきた。シンボリック相互作用論は，トマス(W.I. Thomas)の「人が状況を現実のものだと定義することによって，状況は現実となる」[13] という単なる「状況の定義」(the definition of the situation) を出発点として，役割取得，役割形成を論じていたように思われる。それゆえ，規範的規制の問題は不問に付され，相互作用過程は，つねに試行的かつ不安定なものとして理解されていたわけである。

これとは対照的に，ゴフマンは，“公式の状況の定義”と“個人的な非公式の状況の定義”を区別している[44]。個人は，一次的には“公式の状況の定義”による状況的活動システムへの参加者にすぎない。それゆえ，個人は，組織体内での自分の地位に関連した状況的役割を取得するよう義務づけられている。他方，個人には，“公式の状況の定義”を逸脱しない範囲において，まったく“個人的な状況の定義”も許容されている。この“個人的な状況の定義”こそ，個人の「自由と策動性の可能性」[45] が発揮される側面なのである。

この点は，ミードの自己形成論における「主我」と「客我」の区別にも対応していると思われる。ゴフマンの観点から解釈すると，客我とは，状況的役割に事前に備わっているレディーメイドの自己イメージである。それは，主として，状況的役割期待の存在様式に由来している。一方，主我とは，そのレディーメイドの自己イメージに対して個人が主体的に反応する側面である。シンボリック相互作用論においては，この主我の反応がなぜ生じるのか，その基本的契機の説明が，明かにされていなかった[46]。ゴフマンによれば，この主体的な反応は，個人がそもそも「多元的役割演技者」であることに由来する。つまり，個人は，公式の状況的役割期待の存在様式以外に，非公式に，複数の相異なる多元的役割期待を同時に知覚して自己を組織化しているわけである。こうした背景のもとで，主我と客我の対話が成立する。

上記のような，個人の内部における役割観念を経た後の役割パフォーマンスは，役割観念の十全な実現と考えるわけにはいかない。それは，道徳とエチケットという2種類の規範によって規制される範囲内で，具現されるからである。

構造機能主義的見解は，これとはまっく異なっていた[47]。その文脈においては，個人の行動は，法規範によって直接的に規制されていると仮定されていたため，規範的役割期待への同調的行動以外は，すべて非「役割」行動として否定的サンクションが加えられ社会統制を受けるとされた。したがって，そこでは，かなり硬直した役割パフォーマンスが想定されていたわけである。

ゴフマンの見解においては，現実の個人は，一次的には道徳にしたがって状況的役割にコミットしているが，二次的にはエチケットを逸脱しない範囲において個人的な自発的活動にも従事していると指摘されている。したがって，個人レベルでは，構造機能主義が主張する法規範よりむしろ道徳やエチケットの方が多くの拘束機会をもっていることになる。

換言するならば，ゴフマンの指摘は，規範＝法規範といった一元的な構造機能主義的解釈にあらためて問題提起をしたものと思われる。構造機能主義においては，社会システム（制度）・レベルにおける法規範がそのまま個人の行動にも適用されるという暗黙の前提があった。それに対してゴフマンは，社会から個人にいたるレベルの重層性を示すことによって，規範の重層構造をも明らかにした。つまり，社会システムにおいては法規範，組織体レベルにおいては組織規範，活動システム・レベルにおいては道徳とエチケットといったようにレベルが異なれば，規範の拘束様式も異なるというわけである。たとえば，法規範はしばしば，それを逸脱する者に対して制裁を科すことを予定しているが，具体的な個人が制裁を受ける機会はかなり限定されている。したがって，具体

的な個人の"状況的役割パフォーマンス"は，道徳とエチケット，組織規範，法規範の重層構造によって規制されてはいるものの，道徳とエチケットから法規範へといたるにしたがって，個人への実際的な拘束の機会は減少していくことになる。

ゴフマンは，「役割距離」概念を提出するにあたって，特定の個人の「役割パフォーマンス」と「典型的役割」(typical role) をそれぞれ区別している。いずれも表出レベルにおいて概念化されたものである。前者は，特定の状況における個人の「心理・生物学的」(psychobiological) 要因に条件づけられた表出行動全体を指している[48]。一方，後者は「特定の位置における諸個人の典型的な反応」[49] である。つまり，典型的役割とは，特定の位置についた諸個人の実際の役割パフォーマンスから，「一定の基準」を設定して抽出した「類型」を含意している。たとえば，ある状況的役割の諸個人のパフォーマンスは，年齢や性別の基準を設定して観察した場合，その典型的な反応（類型）は，男性の20代，女性の20代，あるいは男性の50代，女性の50代でそれぞれに異なることが予想できる。要するに，特定の個人の役割パフォーマンスは，一方で社会的状況に，他方では個人の心理・生物学的要因に依存したものである。それに対して，典型的役割とは，経験的事象の観察から導出された，状況的統制を受けない"クロスシチュエーショナル"な類型概念といえるのである。

では，「規範的役割」，「状況的役割」，「典型的役割」，特定の個人の実際の「役割パフォーマンス」のそれぞれの関係を筆者の解釈にしたがって図解した上で，「役割距離」概念の考察を試みてみたい（図-1 を参照）。

役割距離は，端的にいえば，「個人とその個人が担っていると想定される役割との間の"効果的に"表現されている鋭い乖離」[50] と定義される。「個人が担っていると想定される役割」とは，状況的役割を指す。他方，「"効果的に"表現されている鋭い乖離」とは，状況的役割の責務的活動と個人の実際の役割パフォーマンスとの間に生じる乖離とはまったく別のものである。

個人の役割距離が示す乖離とは，「一方では役割責務の，他方では実際の役割パフォーマンスの間におちる何ものか」[51]（傍点は，筆者による）である。個人の実際の役割パフォーマンスは，前述のように，彼の心理・生物学的要因によって条件づけられているため，状況的役割との間に表現上の個人差が必然的に生じる。ここでの乖離とは，心理・生物学的基盤に基づく個人差ではなく，社会学的基盤に基づく，典型的役割レベルにおける"類型的個人差"を含意しているのである[52]。それゆえ，個人の役割距離は，個人に作用する社会的規定要因——

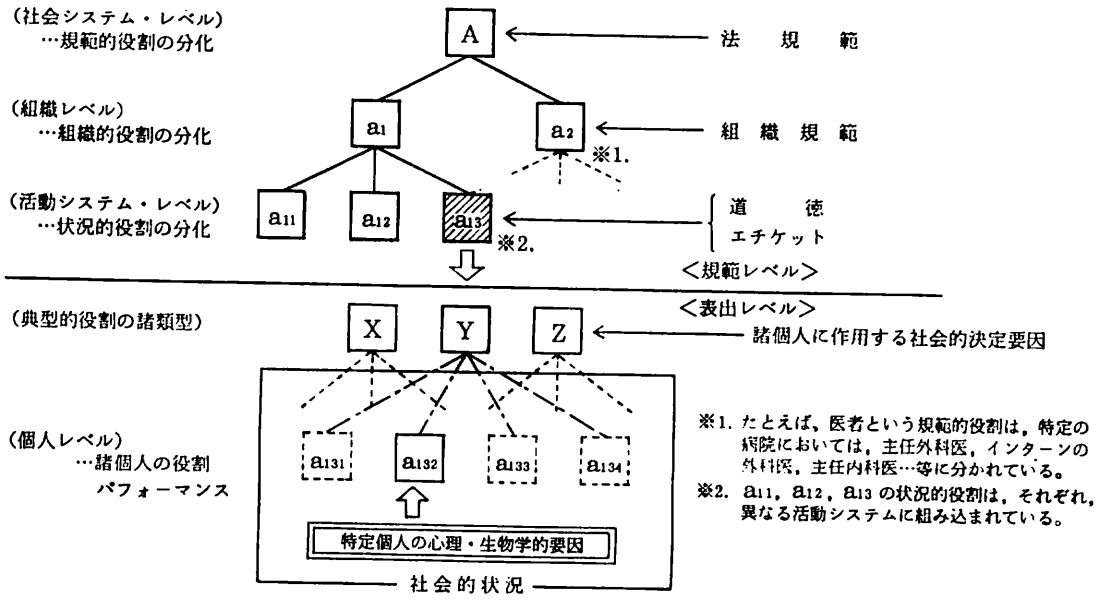


図-1,

表-1.　(S. F. Nadel, 1957, 訳書 82 頁)

| 補充役割 | | 業績役割 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 独立的に定義されるもの | 依存的に定義されるもの | 独立的に定義されるもの……<br>……依存的に定義されるもの | | | | |
| | 関連的役割 (Relational roles) | 所有役割 (Proprietory roles) | 表出的役割 (Expresssive roles) | サービス役割 (Service roles) | 関連的役割 (Relational roles) | |
| 1<br>身体的特徴，年齢，性別，パーソナリティ，血統，素性，出自，血縁，等々に基づくもの | 2<br>親族的役割 | 3<br>技術，資源，知識，等々の所有を示している役割. | 4<br>信仰〔上〕の役割，創造的役割（例「芸術家」），コミュニケーションの役割（例「弁士」） | 5<br>いわゆる「職業上の〔諸〕役割」 | 6<br>対称的なもの：成員役割 協同者的役割 競争者的役割 | 7<br>非対称的なもの：経営者的役割，権威，リーダーシップ役割，階統的(「身分的」)役割，庇護者的役割，等々 |

ゴフマンによれば，個人の「多元的に状況にかかわりのある社会的実体」(multi-situated social entities)[53]——の影響を受けていることになる。

役割距離の社会的規定要因は，個人が自己形成のために利用する多元的同一視の源泉を意味している[54]。ゴフマンによれば，社会的規定要因には，他の状況的役割，組織的役割，組織的役割に関連する規範的役割，特定の集団所属，他の制度的役割などの社会的役割，および年齢，性別，人種，学歴などの文化的役割が含まれる。これらの役割は，ネーデルにしたがえば，「補充的役割」(recruitment role) と「獲得的役割」(achievement role) に分類することができるだろう（表-1 を参照）[55]。

いずれにせよ，上記の社会的規定要因の種類と程度の組合せによって，特定の状況的役割の多様なパフォーマンスには，いくつかの典型的役割が対応することが想定できる。この点を以下のように整理しておきたい。たとえば，図-1 の $a_{13}$ という状況的役割を準拠点とするならば，それには諸個人の多様な役割パフォーマンスが対応している。その多様な役割パフォーマンスから一定の基準に従った観察によって抽出された典型的役割が，XとYとZである。したがって，$a_{13}$ という状況的役割にコミットした特定個人の実際の役割パフォーマンスが，$a_{132}$ ということであれば，それはYという典型的役割にカテゴライズされることになるというわけである。このYという典型的役割こそ，当該の個人の役割距離といってよいだろう。

以上みてきたように，相互補完的な 3 つの側面を包括した概念が，社会と個人を媒介する「役割」概念なのである。「多元的役割演技者」である個人は，状況的役割期待における存在様式——客我——によってのみ自己を規定しているわけではない。社会的状況における個人の自己とは，客我に対して反応する主我も含めた，統一的全体なのである。そして，この主我が“効果的に”表出された側面こそ，個人の関与している多元的役割——社会的規定要因——から創発する個人独自の存在様式，つまり“役割距離”といえるだろう[56]。

## IV.　結論と課題

本稿においては，主として社会学の領域で従来曖昧に使用されてきた役割概念の整理・体系化を試みた。みてきたように，役割とは，一定の社会・文化的条件のもとで行われる諸個人の目的的行為を説明するための包括概念である。役割は，地位と結び付いて社会システムの単位を構成する一方，個人にとっては，一次的には自らの社会的生存確保のための，二次的には創発的自己の多元的欲求充足にかかわる存在証明——自らの価値パターンに従った役割距離の表明——のための手段でもある。したがって，役割概念が社会と個人の媒介概念である根拠は，この点に内在しているといえるのである。

本稿における考察は，実際には，ゴフマンの役割理論を援用することによって体系化の糸口を提示したにすぎない。それゆえ，さらに精緻かつ具体的な体系化のためには，詳細な検討が必要である。その際，レヴィンソンが指摘した役割の 3 つの側面の区別はもとより，「役割」

概念と「自己」概念との相互関連と区別，本稿ではふれられなかった社会システムのもう一つの側面——社会的資源の配分[57]あるいは社会階層との関連の問題についても十分議論されなければならない。

最後に，第2の論点である「役割距離」概念の社会学的含意を，あらためて確認しておきたい。個人の役割距離が，自己の多元的同一視の基盤に対する，"効果的に"表出された主体的反応であるということは，それが，単に社会学的な類型的個人差を指摘するための概念には留まらないことを示している。ゴフマンは，この点について，次のような問題提起を行っている[58]。

> 役割距離が，個人の自我 (ego)，自尊心，パーソナリティあるいは統合性を，その状況のかかり合いから保護しようとすれば，厳密に保持された役割パースペティブのなかにはない構成物を導入しなければならないことになる。そこで，われわれは自我を社会へ戻す方法を見つけなければならない。
>
> 個人が状況にかかわりのある自己から撤退するときは，彼は自分でつくったある心理的世界に引きこもるのではなく，むしろ，ある他の社会的につくられたアイデンティティの名において行為するということに注目することによって，われわれはこのことを始めることができる。状況にかかわりのある自己に関して個人が持つことのできる自由は，他の，同等に社会的な，拘束がある故に持つことができるのである。

役割距離は，社会の平和と個人の自由を前提とした，個人が社会を改変していくための実践的手段を含意している。個人は，社会的所与の役割を受け容れて社会の存続維持に貢献する一方，社会的許容範囲において自由を享受し，観念ではなく実効のある具体的行為によって社会に働きかける。個人は，社会の決定に従いながらもその決定に異議を申し立てることが可能なのである。それゆえ，ゴフマンは個人の役割距離の側面を指摘することによって，社会秩序を維持しながらも個人が社会を改変していくダイナミズムを既存の社会学的役割研究に導入しようとした，という見解が筆者の立場である。

しかしながら，ゴフマンの場合，役割距離概念の提示は，状況的アプローチとはいってもあくまでも"社会"の側面からのアプローチの結果にすぎない。ゴフマンは，社会秩序の維持に関心を払うあまり，諸個人の役割距離が社会に対していかなるインパクトを与え，社会変革を志向し，それを実現していくのか，その点を十分に説明していないのである。それゆえ，個人の役割距離のメカニズムを解明するには，いまだ不十分であるといわざるをえない。

この点での新しい展開の方向を，筆者は，「ライフ・スタイル」(life-style) 概念の彫琢，あるいは「生活システム」(the system of life) モデルの精緻化に求めている[59]。機会をあらためて論じてみたい。

〈注〉

1) 新明正道，1979：『現代社会学の視角』恒星社厚生閣，第5章参照。
2) 次の文献を参照。
Turner, R. H., 1962: "Role-taking: Process versus conformity", in Rose. A. M. (ed.), *Human Behavior and Social Process*, London: Routledge and Kegan Paul, pp. 20-40.
Turner, R. H., 1985: "Unanswered questions in the convergence between structuralist and interactionist role theories", in Hell, H. J. & Eisenstadt, S. N. (ed.), *Micro-Sociological Theory: Perspectives on Sociological Theory, Vol. 2*, London: Sage, pp. 22-36.
3) Levinson, B. J., 1959: "Role, personality, and social structure in the organizational setting", *Journal of American Social Psychology, Vol. 8*, pp. 170-80.
4) 山口節郎によれば，構造機能主義は「規範的パラダイム (normative paradigm)」，シンボリック相互作用論は「解釈的パラダイム (interpretive paradigm)」をそれぞれ前提としている。次の文献を参照。
山口節郎，1975：「社会学と役割理論」，『エピステーメ』11月号，137頁.
また，「規範的パラダイム」と「解釈的パラダイム」の区別については，次の文献を参照。
Wilson, Thomas P., 1970: "Normative and Interpretive Paradigms in Sociology", in Jack D. Douglas (ed.), *Understanding Everyday Life*, Chicago: Aldine, pp. 57-79.
5) Linton, R., 1936: *The Study of Man: An Introduction*, New York: Appleton-Century-Crofts.
6) *ibid.*, p. 114.
7) *ibid.*, p. 105.
8) *ibid.*, p. 113.
9) *ibid.*, p. 114.
10) Parsons, T., 1951: *The Social System*, Glencoe, Ill.: Free Press (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店，32頁).
11) 富永健一，1972：「社会体系の構造と変動」，川島武宜編，『法社会学講座4-法社会学の基礎2』岩波書

店，170頁.

12) パーソンズは，社会システムとパーソナリティ・システムを接合するための方法的基礎として「制度的統合の原理」(theorem of institutional integration) を提案し，両者の統合的解釈を図ろうとした (Parsons, 前掲書，第2章参照)。しかし，彼の理論化においては，社会構造の機能分析に重点が置かれていたため，結果的には，個人の主体性が無視されてしまっている。

13) Merton, R. K., 1957: *Social Theory and Social Structure*, Free Press.

14) Gross, N. *et al.*, 1958: *Explorations in Role Analysis*, John Willy.

15) Nadel, S. F., 1957: *The Theory of Social Structure*, London: Cohen and West. (斉藤吉雄訳『社会構造の理論——役割理論の展開』恒星社厚生閣).

16) 新明正道，1967：『社会学的機能主義』恒星社厚生閣，第3章参照。

17) Dahrendorf, R., 1959: *Homo Sociologics: Ein Versuch zur Geschichte, Bedeutung und Kritik der Kategorie der sozialen Rollen*, Köln: Westdeutschen Verlag (橋本和幸訳『ホモ・ソシオロジクス-役割と自由』ミネルヴァ書房，46頁)

18) 訳書，87-88頁.

19) 訳書，16頁.

20) Blumer, H., 1969: *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, University California Press, p. 2.

21) *ibid.*, pp. 2-21.

22) Mead, George H., 1934: *Mind, Self and Society*, Chicago: University of Chicago Press. (稲葉三千男ほか訳『精神・自我・社会』青木書店)

23) 訳書，164-176頁.

24) 訳書，187頁.

25) 訳書，190頁.

26) Turner, R. H., 1956: "Role-taking, role-standpoint, and reference-group behavior," *American Journal of Sociology, vol. 61*, pp. 316-28.

27) Turner, R. H., 1956, p. 316.

28) *ibid.*, p. 321.

29) *ibid.*, pp. 321-23.

30) Turner, R. H., 1962, p. 22.

31) Shibutani, T., 1961: *Society and Personality*, Prentice-Hall.

32) Urry, J., 1972: "Role performance and social comparison process", in Jackson J. A. (ed.), *Role, Sociological Studies 4*, Univ. Cambridge Press.

33) Blumer, H., 1969.

34) ロングは，構造機能主義における人間像が「過度に社会化された人間」であることを批判した。次の文献を参照。
Wrong, D. H., 1961: "The Oversocialized Conception of Man in Modern Sociology", *American Sociological Review, Vol. 26*, pp. 183-93.

35) Goffman, E., 1961: "Role distance", in *Encounters*, Bobbs-Merill, pp. 83-152. (佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い』誠信書房)

36) 訳書，95頁.

37) この論点は，パーソンズの「制度的統合の原理」の基本的論理を掘りおこしたものに他ならないと筆者は考える。というのは，個人の社会生活への参加は，一方で個人の社会的生存を保証し，他方で社会構造の機能的先行用件の充足を促しているからである。個人の行為が，本来，目標志向的であることを考慮するならば，個人の欲求が活性化され，動機づけられるための前提条件となる目的——活動システムが個人に対して先決していなければならないことになる。

38) 訳書，97頁.

39) 訳書，98頁.

40) 訳書，98頁.

41) *ibid.*, p. 96. 訳書，99-100頁.

42) 訳書，95-96頁.

43) Thomas, W. I., 1928: p. 572.

44) ゴフマン，『出会い』，147頁.

45) *ibid.*, p. 132. 訳書，146頁.

46) 船津衛，1976：『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣，第6章 199-201頁.

47) 同上書，169-172頁.

48) Goffman, E., 1959: *The Presentation of Self in Everyday Life*, New York: Doubleday Anchor, pp. 253-4. (石黒毅訳『行為と演技』誠信書房，299-300頁.)

49) ゴフマン，『出会い』，95頁.

50) 訳書，115頁. 他者によって認知されて，はじめてその活動は "効果的に" (effectively) 表現されていることになる．それゆえ，その活動は他者の行為に影響力をもっている。

51) 訳書，124頁.

52) ゴフマンによれば，「役割距離の概念は，責務と実際のパフォーマンスとのあいだにある乖離の一類型を扱う社会学的手段を提供する」(訳書，124頁)。

53) 訳書，160頁.

54) 訳書，146-61頁.

55) Nadel, S. F., 1957.

56) シンボリック相互作用論において問われていた個人の主体性，能動性，独自性といった側面も，ゴフマンに従えば，結局は，社会的に規定されるということになる。

57) 社会的資源の配分の過程は，「ヒト」と「モノ」との関係を規制する過程である。社会的資源には，有形の物的対象，無形の関係的対象，文化的対象がある。それらは，社会システムの目的を達成するための手段である「用具」と，システムのアウト・プットであって，個人の欲求を充足させるような「報酬」の2つの側面に分けられる。両者は，パラレルであり，また同一のものが，文脈によって用具になったり報酬になったりする点で，互換性がある (富永健一，1972，159-161頁)。

社会的資源の分類

| | 用　具 | 報　酬 |
|---|---|---|
| 物　的 | 資　本　財 | 消　費　財 |
| 関係的 | 権　　力 | 威　　信 |
| 文化的 | 知識，情報 | 称讃，尊重 |

（富永，1972，161頁）

なお，最近では，消費財のなかにサービス，情報といった無形のものも含めて考える傾向がある。それゆえ，この分類のしかたが必ずしも有効とは限らない。

58) ゴフマン，『出会い』，132頁.

59) 社会現象についての全体論的モデルと個人主義的モデルが相互補完的であることを明らかにするため，両者の中間レベルに新しい分析レベルを確立する試みが「生活システム」アプローチである（井関利明，1973：「「発展」と生活体系」，原編，『発展の統合理論序説』アジア経済研究所，191-192頁参照）。その基本的仮定は，次の2点である。(1) 個人の関与している多元的役割は，それに対応する生活システムを限定する。(2) 生活システムの形成，維持，発展のため，個人は，生活資源を選択し，確保し，使用・処理することが必要である（井関，1974，63頁参照）。

生活システム論の視点から，「ライフスタイル」論を展開したものとして，次の文献が詳しい。

井関利明，1974：「消費行動」，富永編，社会学講座8『経済社会学』東京大学出版会

井関利明，1979：「ライフスタイル概念とライフスタイル分析の展開」，村田ほか編，『ライフスタイル全書—理論・技法・応用—』ダイヤモンド社

松本　康，1985：「現代日本の社会変動とライフスタイルの展開—生活システム論の視点—」，『思想』第4号，通巻730号

松本　康，1986：「現代社会とライフスタイル」，金子ほか編，『クオリティ・オブ・ライフ—現代社会を知る—』福村出版